

風待ち

七原ハルコ

五箇年日記がそろそろ終わろうとしている。

日記帳を手を取ったときの、一瞬のためらいは何だったの
だろう。今までと同じ。これまで、一年、もう一年、三年と
ダイアリーを厚くしてきたのだ。今までとすることは変わら
ないさと胸の中で呟いて、文房具店の奥、揺り椅子でうたた
寝をしている店主を呼んだ。五年。途方もなく長く長く感じ
た期間はいつの間にか行き過ぎて、その断片はたった一冊に
まとめられてしまった。

親友のルクラン・ラングレーは三冊のダイアリーのすべて
を、十ページも書かないで無駄にしまっているらしく、
僕に助言を求めてきた。思いつくままに口にする。とりあえ
ず一箇年から気楽に始めてみることに、あるいは上等なのを買
い心理的に圧力をかけること、三行ほどでも良しとすること、
名文を書こうとしないこと。しかし最も大切なのは、継続力
でもとつときの日記帳でもなく、必要性だと思う、と僕はア
ドバイスを締めくくる。思いつくが早いかナプキンや日めく
りの裏にアイデアや計算式を書き殴るルクランにとっては、

それを紐で綴じるので十分ライフログとなるのではないかと
なるほど。一つにくぐられた癖毛の長髪が揺れた。面倒く
さがらずに切ればよいのと思う。

「じゃあおたくにはあるわけだ。必要性ってやつが」
「そうなるね」

僕は頷く。日々を書き記さなければいつだって強く思っ
ていた。過ぎ去っていく時間を留めておかなければという使
命感が、僕にはあったのだ。



親という存在を疑ったことがおありだろうか。

それは下手をすれば自分自身以上に懷疑を差し挟むのに困
難なものの一つかもしれない。目を開けて最初に見る顔。耳
に染み込んだ声。いつだって体温とミルクと子守唄をくれた
人と、自分との間に血の繋がりが無いなんて。子供のうち
に気付けたのだとしたら、それはよっぽどの名探偵かソ
ブ・オペラの見すぎだ。

僕は生まれてからしばらく、血の繋がりのない大人と過ご
した。名前を除けば、父が僕に贈った最初のもの。文化的習

慣、教養、たつぷりの愛情、そして地獄とはどんなものか、痛いほど僕に教えたひと。

その人の肌は白かった。表情は柔和、体つきはしなやか、胸はなければ男性的シンボルも備えていないしで、彼と呼ぼうか彼女と呼ぼうかあの頃は分からなかった。暗い色の髪は僕にキスをするたびに頬をくすぐって、声は高くも低くもなく深く穏やかで、そして眼差しはほとんど言葉のようだった。あの人が送ってよこす視線は、僕の内部でようやく雄弁な口を開く。胸の奥底で言葉が鳴り響く。この効力の絶大なこと。どんな生活をしていたのかと言われれば、ごくありきたりな「幸せな親子」を想像してもらえれば十分だと答えるだろう。安心して甘えきり、たまに叱られ、喧嘩をしては仲直りをする、そういった。

僕が地下室で父を発見したのは七つか八つのときだったろうか。父といっても棺の中に収まっていたので顔はまだ見なかったが。棺桶というものを知らない僕が、無邪気に蓋を開けなかったのは、それをぐるぐると取り囲み封をする茨の群れがあったからに他ならない。

なんだこれ、と伸ばした手がちくりと痛んだと思った一瞬

間に意識は遠のき、次に目を開けたときには気遣わし気なあの人の眼差しがいつぱいに映りこんだ。

「……僕は」

「寝ちゃってたね。指はもう痛くない？」

身を起こす。途端に空っぽの胃が悲鳴を上げた。シチューがあるよ、とあの人は言った。

「これなあに」

「ベッドみたいなものだよ。この箱の中で、君のお父さんが眠ってる。もうずっと」

「お父さん。それじゃあ、あなた」

「私はお母さんでもないんだ。君のお父さんの、旧い知り合。い。ごめんね」

顔をあの人の肩に埋めて、僕はまだ頭蓋骨にこびりついている眠気と、空腹と、未だ知らぬ父への思慕と、目の前の大好きなひとに対する混乱とに耐えた。棘が刺さり僕はしばしの眠りに落ちた。茨にくるまれて、父は眠っている。

「おとぎ話みたい」

「私は『茨姫』で、魔法使いだから」

ヴァン、と名前を呼ばれて顔を上げた。あの人は僕の目を、長いことじつと奥底まで覗きこんだ。その瞳の中に、僕は自

分の目の反映を見出せた。それほどに。

「魔法使い？」

「そう。なんだって叶えてみせる。それができる、私には」

その人は一度僕を抱えなおし、そして続けた。

「いずれ君のお父さんを目覚めさせるよ、他でもない君のために」

それはお姫さまじゃなく王子様の役割なのではと思ったが、黙っていた。いずれ父とあなたと僕で暮らすのだねと、愚かにも僕は信じた。それはとても素敵な未来に思えたのだ。

数年後、あの人は予言を完璧にやり遂げた。そして僕が眠っているうちに消えてしまった。

朝起きて、何かとてもよくないことが起きてしまったとすぐに気付いた。カーテンを開け放つ気配も、優しく揺り起こす腕も、朝食の匂いも、一切がなくなっていた。心臓が血液を送るのをひたすら嫌がって、僕はしばらく動けなかった。何も知りたくないし、見たくもない。ぎゅっと拳を作って、開いてしているうちによりやく諦めがついて、家中を探した。だがどのドアを開けても、待つのは空っぽの部屋ばかりだ。あの心地といったら。僕のために子守唄を歌ってくれる声が、

涙を拭ってくれる親指が、おやすみを言う唇が、もう永遠に失われたのを僕は悟るのだ。

父が目覚めるのにはもう少し時間がかかった。いい加減果然とするのにも疲れた僕は、突如として階下から嘔き上げた風で完全に我に返った。確信めいた想定と古ぼけたランプだけを持って、地下室へ降りる。いつも黒く禍々しい棺を取り巻いていた、あの頑丈で忠実なる茨たちは、今や恭しくその身を床に垂らしている。ガツガツ、と鈍い音が内側からし、最後にガコンと音を立て、蓋が蹴り飛ばされた。ランプの頼りない光に、埃が反射してきらきらと舞う。棺の中の赤い絹張りが、なめらかに艶めいた。

半身を跳ね起こしたその人と目が合う。

一瞬のうちに、それは感得された。彼が僕の父親であるということ。僕の肉であり血、いずれ辿り着くところの未来、逃れがたい宿命、そのすべて。輝きを返す目にはどこか金属のような冷たさ鋭さが宿っている。僕は完璧に凍り付いた。彼は息子に一瞥をやり、すぐに周囲を見渡す。

「メルはどうした」

その低い声は乾いてひび割れて、埃っぽく湿っぽい部屋に散らばった。メルという名前を僕は初めて耳にした。男性で

も女性でもあり得る、古い言葉で海を表す名前。あの人によく似合う。そう、きっとそうだ。

「あいつはどこだ」

「いないよ」

もうどこにもいない、と口にして、目は冗談みたいに潤みだした。言葉は事実となつて、ようやく実感として心臓を叩く。わっと泣き出した瞬間に、父は目を見開き、ぎこちなく手をさまよわせた。会ったばかりの父の様子なんてどうでもいい。なんであの人は消えてしまったのだろう、僕を置いていつてしまったのだ。父を目覚めさせる引き替えなのだろうか。それなら魔法なんていらなかったのに。最後に話した言葉はなんだったろう。昨日のことなのに思い出せないなんて。

「……オイ」

彼が戸惑うのは僅かだった。男は素早く僕の顎を掴み、黙らせにかかったのだ。驚きで涙は一瞬で引っこんだ。

「あいつに帰ってきてほしいか」

頬に食い込む指の冷たさと力強さに、息を忘れた。大人にこんなにも乱暴に扱われたことがなくて、僕は完全に怯えていた。ああこの人は危ない人だ。恐ろしい人だ。こちらの気持ちなどどうでもよいのだろう、彼は唇の端を曲げて笑う。

目になぶるような、意地の悪い光を隠しもせず。

「あいつに、帰ってきてほしい。なあそうだろうか？」

変な汗が背中を伝って冷たい。僕は頷くほかを知らなかった。それに彼の推察は当たっていたのだ。メルと呼ばれたあの人も一度名前を呼ばれるならば、頭を撫でてもらえるのなら、僕は何度かこのおぞましい男に殴られたってよかった。

できるのと尋ねると、誰にもを言っている、と尊大に答えられた。彼は少し伸びをして、首と肩をほぐすとすぐ、地下室の階段を上がついていく。どこに何があるのか知っているかのような顔で台所へと歩いていくのだ。日の当たるところで見る顔は、自分に似ているとはとても思えなかった。しかし灰にほど近いような金髪は、鏡の中でよく見つける色をしていた。林檎とシナモンの香りのするエールの青い瓶を手にして、父は地下室に戻っていった。僕はただ彼の歩く後を追うだけだった。鬱陶しがられたらという不安はあったが、父は僕のことなど蠅の唸りとも思わないようなのだ。どこから出したのだろう、彼はナイフで床に散らばった茨を切断し、その一端を瓶の細い口に挿し入れた。ぼたり、ぼたり、と茨から黒い液体が染み出していくのが分かった。

「あいつの魂をいくらでも裂いて、様々なやり方で試してや

ろう。上手くいくまで、何度もだ」

「人を生き返らせる魔法って、そんなにたくさんあるの」

「太古から人間が望むことなんて決まりきっているのさ。必要があるから魔術体系は創られる。チョコレートを目たぶで弾いて遠くに飛ばす魔法なんて誰が開発する？」

だからあいつが目を覚ましたら、どこにも行かないでください、くらいねだつてみせろよ。そう言つて父は僕の額を弾く。尖った爪で皮膚は破れ、血が目のすぐそばを伝った。傲慢な男もさすがにこれは謝った。

その晩、僕は高熱に苦しんだ。一日であらゆることが変化してしまつて、心も体もばらばらになつた気分だった。知恵熱経験済み。つまり幼年期の終わり。

それからの日々を、どれだけ僕は正確に覚えているのだろう。



北極熊に抱かれて眠る夢を見た。透明な毛は空気を含んで暖かい。目をうつすらと開ければ、満天の星と、吐いたそばから凍り付く息がきらきらとしていた。その輝きを、確認し

て、また少しうとうとして、また目を開いて。果てることのないさざなみの音、しんとした冷たさ。人間は僕一人だ。そう思つたら、北極熊は僕をぎゅつと抱きしめた。暖かさに腕を回すと、獣臭い息が鼻にぶつかつて目が覚めた。はっはっ、と忙しく息を吐く犬が僕を見下ろしている。おまけにペロりと頬を舐めてくる。寒冷地産の真っ白な毛をした大型犬。ベルはベッドに忍び込む癖があつた。

おはようを言い、頭を撫でて、体を起こした。窓際で、ゼンマイ式の天体模型が揺れている。夢の中では、金星と月と木星が一列に並んで見えた。心に思う夜は多く、浅い眠りは夢を誘つた。でたらめで馬鹿げていて美しく、僕はいつも一人だった。一人ではなくても、一人だと感じた。

窓を透過して、煉瓦色の朝焼けが僕の網膜を刺す。眼下には歴史ある城壁都市がある。濃密な霧で満たされた灰色の街。支度をして、僕もあの中へ飛び込んでいく。

五年前に慣れ親しんだ街を離れた。提案者は無論父で、移住先も勝手に決めてしまつて、真夜中に叩き起こされたと思えばわけも分からないままに引越しは完遂された。どこへ行くのかと尋ねると、昔住んでいたところだ、と父は答えた。

遠くを見つめる横顔はぴんと張りつめていて、誰と、という見え透いた問いかけを、僕は胸の中にそつと落とす。父の横暴を詰る気はもう起こらなかった。随分と慣らされている。

あの人が消えてしまつてから、僕は血の繋がった父、ブルム・アーヴィングと大半の時間を過ごしている。心労は計り知れなかった。彼は苛烈な男だ。基本的には放任、たまに接触してきたと思えば大概が横暴。気まぐれな態度と、波のある感情。不発弾と新婚旅行をする方がまだ気が休まるかもしれない。僕がもつと幼ければ人格形成に多大なる歪みを生じていたに違いない。十まではメルに、あの人に育てられてよかったとつくづく感じて息を吐く。

このままでは身が持たない。それより何より心が持たない、とてもじゃないけれど。そう思う。心底厄介なのは、この男が、こんな乱暴な支配者が、見ていて泣きたくなるくらい綺麗だということだ。髪と目の色のほか、僕と父との類似を示すものはない。まるで狼や獅子と実験用のラットとを比べるような様相だ。鏡を見るたびに僕は、死に別れた母の顔かたちを臆気ながら悟るのだ。しかし何を望んでいるか、何を願っているかという点に関して、僕とあの男との輪郭はぴつたりと重なるだろう。僕ほどにも、自分の敵に一段と似てしま

つた者がこれまでにいただろうか。

二人の魔法使いを親（あるいは親代わり）としながら、僕に魔法は使えない。だから僕は学ぶ。人の積み重ねてきた推論と証明に浸かり溺れる。数学も化学も物理学も天文学も、時間を費やすのにちようどいい。ロジカルで釣り合いがとれていてエレガントで。

架空の数を使った数式の番号に、斜線を入れて、終業のベルが鳴った。望むままに勉強させてくれるだけ、彼は親として機能している。何を言っても異論がないということはすなわち、無関心の証明なのかもしれないが。

窓の向こうで工場が一斉に煙を吐き出した。霧の街は、たちどころに霧と煙の街になる。城壁都市の一角を占める工場。「エンプティ・ダンプティ」。ふざけた企業名だ。羽を生やし、ひび割れた卵のエンブレムを掲げ、この街を潤している。

何を隠そうあれは父のものなのだ。父は五年前、僕と共にこの街に舞い戻り、乱立する小さな工場を取りまとめ公社とし、二年ほどで目覚ましく成長させ、そして有力者として現在も居座っている。なぜ魔法使いが実業家の真似事をしていくのだろう。一般に、金・女、権力、と手に入れば次に欲

しがるのは名声、果ては不老不死と言われている。既に老けない肉体を手に行っている父が何を目指しているのか、まったくもって判然としないが、あの横暴な男を理解できたことの方が少ないのでどうでもいい。

ついでに言えば彼は実業家どころか篤志家になりつつある。恵まれない子供たちの救済に金を出すわ、救貧院にも支援をするわ。冬には社員とこの街の住人には、誰一人残すことなく、プレゼントが贈られる。送り主はブラム・アーヴィング。目的はどうあれ世の役に立っているのだし否定はしない。しかし似合わないにもほどがあるので、いつも鼻で笑っている。嘘だ。

本当は嘘だ。薄々、僕は父の狙いに気付いている。知っていて何も知りませんという顔をする。そうして泳がせている。どうすればいいのか、どうしたいのか、決めきれないままに。

工場の機械の音は途切れない。校舎から出る。フェンス越しにバスを見送った。やつれた顔の、しかし目ばかりを爛々と輝かせた、同じ表情をした人々が運ばれていく。窓はあるのに余所見もせず、きちんと気をつけの体勢で。善良で清潔で大量生産の人形じみた微笑みの、不気味なことと言ったら。

校門を出た途端に、ベルの吠え声が出迎えた。お座りをする犬の隣で、お疲れ、と少年が笑っている。つんつんと重力に逆らう短髪。親友のラングレー兄弟、の弟の方だ。

「でっかいわんこが闊歩してるから追っかけてきたんだ。頭いいなーこいつ」

「たまにあるんだよ。ちゃんと預けてきたのに」

頭を撫でてやる。いつも笑っているようなベルの顔は、ますます情けなく緩んだ。

「何してたんか」

「俺は兄貴を待ってて、ついでにわんこと一緒にヴァンを待ってた」

「そっか。そりゃごめん」

「勝手に待ってただけだぜ」

ローリンは歯を見せて笑う。煤けた灰色の街にあっても、太陽はローリン・ラングレーだけを贖済する。彼と話するとき、

短い間にばちばちとスパークする火花を思う。自然と幼い頃に戻って、腹の底から愉快になれる気がする。

「俺って結構待つの得意なんだ。きよるきよるしてるだけなんだけど、あ、今日はわんこもいたな」

「ベルだ」

「ベルな、ヴァンの犬はベル。こいつも多分待ち合わせの天才だぜ。ずっとここにこしてんだもん。嬉しいんだよな、待つ誰かがいるってことが」

ベルの耳を搔いてやりながら、ローリンは言う。その言葉は素早く忍びこみ、僕の髄に染みこんでいく。思い当たる理由もなく、視界がにじんだ。待つ誰かがいる。待つというのは、究極的に言えば、一人で生きてはいないという証明なのかもしれない。

「そうだな」

「おいローリン」

遠くで、長身の男が手を挙げている。彼の兄、ルクランだ。ローリンはじゃあな、と駆けていく。ルクランは僕を指さし、今日だ、待つとけ、と叫ぶ。了解の意を込めて手を振った。

街の中心部に、白い大きな巻き貝のような外観の建物があ
る。柵を飛び越えて、錠前を外し、見た目だけ錆び付いた扉
を開け、内部に身を潜らせる。僕は今日も秘密の生活を営む。

「昨日の続きです。ルークをgの4」

闇の中に声をかける。しばらくして、振れた声が返った。

「クイン、bの2」

ランプが点き、ジェームス・ロイド老人の顔を見つけた。
「歯車の研磨は済んだぞ」

「今日、追加のコート剤が届きます。キングをfの5へ」

この建物すべてが、一つの大きなオルゴールなのだった。
広いダンスフロアまで設えられた、かつての華やかな時代の
象徴。今は朽ちたまま、ただ保管されている。

僕はその中に一人で立てこもり、戯れに錆び付き朽ち果て
た機械を修理し始めた。しかし実際は一人ではなくて、ここ
に住み着いているロイド老人と出会い、そしてオルゴールを
復活させることになったのだ。彼には音感がなく、動力部は
ともかくオルゴールのディスクやベル、パイプを直せなかつ
たらしい。

油でてらてらと光る動力軸、歯車、細かいネジやベル、人
形のパーツは、都市空間に似ている。一つ一つの配置に意図
があり、すべてが絡まりあつて繋がりが、正しい向きに回転し、
力が加わり、次々に伝わっていく。計画されたとおりに動く。
その中では、僕は安心できた。盤も駒もないチェスをしな
がら、ベルやちぎれたハープの調律をしながら、たまにひよ
っこり遊びにやってくるベル（犬の方だ）を撫でながら、時
間を殺していく。父が不可能に挑むのを待つ。あるいは諦め

るのを待つ。時機が熟すのを待つ。他でもないあの人の贈りものを待つ。

唐突な気配がして、僕は振り返った。

毛布の塊が音もなくバルコニーに落ちるのを見た。確認しなくとも、塗装剤の缶が入っていると知っていた。飛び去っていく機械から、親指を立てた手がにゅつと突き出される。ローリンだ。その後を、機械仕掛けの衛兵たちが追いかけていく。弄ぶような旋回。ローリンは難しい数式も力学も何も知らない。ただ重力に逆らう喜びと、兄と兄の産み出した機械に対する信頼だけを持っている。生きるのをやめられないと、笑うように飛んでいく。



父と対面を果たしたあの日から、一年ほどで彼はすべての準備を終わらせたらしい。僕には魔法の素養はまったくないから、何が必要だったのかは知らない。何ごとか呟いて、すぐに父は血を吐いて昏倒した。心臓が落ち着かない。華々しく迸る鮮血は、僕の目に焼き付いて、目を閉じたら瞼の裏に、

開ければ白い浴室の壁に、緑色の斑点を描き出した。失敗したのか、成功したのか。もし何も起きなかったら、今度こそ一人になってしまおう。何か呼び出せたとして、果たしてそれは、あの人の形質を備えているか、僕との記憶を保持しているか、さよならをおやすみにすり替えた、あの吐息混じりの声はそのままか。

青い瓶の中に入っていたから黒にしか見えなかったが、茨から採取された液体は、血のように鮮やかな赤だった。それを一滴垂らした場所、バスタブが眩ゆく輝き、風が起こつて、止んで、目を開けたときには懐かしい顔が、生まれたばかりのような瞳のまま見返していた。僕を一渡り上下に眺めて、一息を吐いた。胸と肩が忙しなく動いている。ついあの人から目を逸らす。それはつぎはぎだらけの痛ましい姿のためでも、曲線的な柔らかな形のためもあった。

「ヴァン」

名前を呼ぶ掠れ声には、測り知れない悲しみが絡んでいた。あの人と目があつた。床に転がった父を見て、お綺麗な唇から漏れ出た言葉は、呪詛だった。僕の血は一瞬で凍り付く。

「……余計なことを」

父のガウンをバスタブに投げてから、メルが真つ先にしたのは、横たわった父の血に指を浸すことだった。彼女はその一滴を、赤燐の剥げたマッチ箱にしまった。そして父の体そのものは茨で再びくるんでしまった。彼は完全に冷たくなつてしまつていて、眠っているなどとはぐらかされても僕は看破しただろうし、彼女も僕を軽んじなかった。

「これ」

「時間を止めるだけだ。触らないで。眠っちゃうよ」

「せっかく会えたのに眠らないよ」

「こいつに、痛いことされてない？ 大丈夫？ ちゃんと食べさせてもらつてる？」

「大丈夫」

答えるが早いかメルは僕を抱きしめて、また会えるなんて思わなかった、と呟いた。

「僕は会いたかった。ずっと会いたかったよ」

途端、痛みを堪えるような顔をして、そう、と彼女は笑つた。そして、僕の前髪をどかして、まっすぐに僕の目を覗きこんだ。

「ブラムかと思つたよ。びっくりした」

「そうかな。似てるって言われなければど」

「髪が伸びてるね」

おいで、切つてあげる。昔のように手を引かれて、居室まで歩く。ありふれた動作だった。その分、それに付随する記憶は夥しい量だった。何十日分、何百日分の手を繋がれた思い出が一齐に押し寄せてくる。泣き出したかつたけれど、それよりは彼女の顔を見ていたかつた。

居室の片隅に置いてある縦型のピアノを見て、僕は昨晩の父の言葉を思い出した。それは父が目覚めてから新たに買ったものの一つだった。録音機はどこに置いただろうか。

「ピアノをもう一度弾いてほしいって、あの人が言つてた。素晴らしい腕だったって」

「どの口が」

固まった僕に気付いて、彼女は相好を崩した。力ない笑みではあつたが。

「私がピアノを弾いているとき、彼が蓋を、ね、閉めたんだ」

あれ以来弾けないんだ、ごめん。君が練習するといい。僕は想像した。めちゃくちゃな不協和音のフォルテッシモ、この人の指が碎ける音。ぞつとしたけれど、おそらく僕はピアノに向かうようになるのだろう。彼女の言葉によって。

ニュースペーパーを敷き詰めて、椅子を置き、バスタオルを首に巻いて、僕はその上に座る。しゃきん、しゃきん、という缺の音が快かった。髪を触るあの人の手も。

「もうこんなことは起きないよ、きつと」

「どうして」

「魔法って、何もなしに使えるものじゃないからだよ。現に君のお父さんの心臓、止まっちゃったし。何か難しいことを叶えようとしたら、必ず同じ価値の何かで払わないといけない。お店でお買い物をするときと同じようにね」

「あの茨は？」

「ああ、あれならいくらでも。向き不向きがあつてね、私たちは人から魔法を与えられたけれど、できることにはかぎりがあつて。例えば君のお父さんなら、攻撃や自分の怪我を直したり、人を操ったりなんかは得意だけど、人を生き返らせるなんてのは一番の苦手分野のはずだよ」

鼻の頭に引つかかった髪を、メルの手は払った。その手首にはぐるりと傷と縫い跡があり、膿んで血を流している。あの尊大な父が、健気にも命を投げ打った結果が、不完全な体を引きずる彼女なのだった。ふと、聞いて、とメルは言った。

「ダイヤモンドはきらきらしてて、高くて、誰もが欲しがら

けど、けれど、あれがちよつと庭の土を掘り返して出てくるんなら、誰も見向きもしないんじゃないだろうか」

慣れ親しんだ、言い聞かせるときの声の調子だった。ちつとも押しつけがましいところのない、フラットな声。僕はこれで育ってきたのだ。口を噤んで聞くことしかできなかった。

「砂粒を顕微鏡で見たことは？ 石英だってダイヤモンドと同じくらい、透明で、きらきらしてる。どうしてあれを誰も欲しがらないのだろう」

しゃきん。床に髪が散らばった。髪も爪も放っておけば伸びていく。僕は生きているから。歯はもうすべて抜け替わったし、学校に通いだして、覚えたことがたくさんある。すべて伝えたかった。けれど黙っている。メル声を聞いている。

「お芝居のチケットがあんなに高いのは何でだろうね。素晴らしい監督演出役者、演奏家、いろんな観客が集まる。同じ舞台は一度だけ、二度と起こり得ないからではないかな」

彼女は僕の前に回った。前髪に櫛が通され、そして彼女の指で挟まれる。何を考えているの、と尋ねることができなかった。父と同じ色だと、少しは思いもしただろうか。

「価値が生まれるのはなぜか。すべては限られているからだよ。数が少なくて、一度きりだからだよ」

毛先を彼女の指が払った。目が合う。

「命は」

メルは押し黙った。音も色彩もなくしたリビングで、言うべき言葉を探す。深い深い海の色をした目は、とつくに凍え果てていた。

肩から絞り尽くすような息のあとで、彼女は口を開いた。

「明日にはちゃんと、君のお父さんを元に戻すから。あの子に子育てはできないだろうと思つて、今度だけはと君と一緒にいた。それだけのこと。あの方法は二度と使うなつてあの子に言つておいて。負担が大きすぎる」

「あの人は一年かかったよ」

「頭の良さも運動能力も力の強さも顔の美しさだつて彼の方が上だろうね。いつだつてそうなのさ。けれど」

温度のない手のひらが頬を撫でた。顔を上げる。彼女の暗い色をした髪が、僕の頬を滑っていく。

「魔法は私の方が上手だから」

いつか父の棺に誤つて触れたときと同じような、抗いがたい強烈な眠気が、僕を襲った。だめだ、眠るな。せつかく会えたのに。

「いやだ」

「聞いて。人は一度きりを手探りで生きる。それがルールだ。世の中には法則が溢れてる。蜘蛛の糸みたいに張り巡らされてる。それを学んで、見つけて、覚えるんだよ。そして分かる。美しいものも、不便なものも、汚いものであつても、意味があると。そして私たちの間違いも」

ああ間違つてる。間違つてる。父が死ぬのは嫌だ。けれどメルが消えてしまうのだつて僕は嫌だ。一番嫌なのは、僕の意識がないうちにこの人がすべてを終わらせて、知らないうちに全部を消しさつてしまうことだ、さよならも告げないで。堪らず手のひらに爪を立てる。痛みがもう、随分と遠い。

「生きすぎたよ。けれど君に会えた。もう十分なんだ」

ぼくはあなたにもいてほしい。届いて欲しい言葉は、喉の奥でつかえたままだ。

「明日、浴室には絶対に近づかないと約束して」

「俺が重たい。」

「ごめんね。……愛してる、ずっと」

目を開けた瞬間に、心臓に異物が紛れ込んで、ぼこりと音を立てた。嫌な予感は二度目だった。ベッドから飛び出して、足は勝手に浴室に向かう。何かに囁かれるようにして。僕は

ためらわずにバスルームのドアを開けた。そして後悔した。血の気の褪せた白い体が、浴槽に浸かっている。薄めたシロップみたいに艶やかな、イチゴ色の水の中で。一度瞬きをする。メルだったものはまだそこにある。嘘だ、と言葉は勝手に口から滑り落ちた。膝から崩れ落ちることも、悲鳴を上げること、目を伏せることもできなかった。三度目の瞬きで、メルの体も薄紅色の水も、何一つ残さずに消えてしまった。かすかな風が背中を押してくる。空っぽのバスタブを眺めたまま、僕はただただ震えていた。噛み合わない歯がちがちと音を立て、頭はまったく動こうとしなかった。いつまでそうしていたのだろう、肩から男の手が伸びてきた。僕の脇を無骨な指が閉じさせて、そして大きな手のひらが両目を覆った。もういいと言うまで、父は僕の目を塞いでいた。僕の小さい手のひらには爪の跡が残っていて、そしてつきつきと痛みを訴えた。

あの日から、僕はロゼ・ワインを飲めないでいる。



機械を美しいと思う。ネジ、大小の歯車の連なり、油圧と

ディスクと動力軸。ばらばらの単体が、法則と力学の見えない糸でそれぞれに繋がっている。一つとして無駄なものはない、すべてに意味があつて、約束通りそこに存在する。

「無駄がないものをいっとう綺麗って思うってことは」

パストラミを挟んだパンを一口かじり、ローリンは続けた。「他のものはそうじゃないってことか」

「余分なものが世界を作ってるってのは世界の真理さね。レトリックとか、ダイレクトメールの山とか。無駄のないものはいいね。俺も思うよ。三種類の文字と等号で表せる公理は美しい」

話に加わりながらも、ルクランの目は手元の方眼図に落とされている。計算尺を動かすと、高いところで結ったばさばさの髪も揺れた。暑いらしい。片隅でロイドさんは眠っている。そのいびきを聞きながら、僕は話を続ける。

「味の濃いのでだめなんだっけ」

「やるんならそのばさばさのチキンにしとけよ」

ローリンはささみのスライスを、日陰にいたベルに投げる。涼しいところを探すのが上手い犬だ。

ラングレー兄弟は飛行機的设计に夢中である。小型で球形の、空飛ぶ機械。二人揃って学校には行っていないが、兄ル

クランは僕の知るかぎり、普通の人間の中では一番の天才で、弟は実践と失敗のスペシャリストだ。

普通の、なんて付けなければならぬのは、父が規格外だからに他ならない。リビングでルクランに頼まれた設計図の検算をしていたら、父は一瞥しただけで難解なミスを見つけだしたし、ロイドさんや彼らと出会うまで、僕は自分のチェスの実力に無自覚だった。

この城壁都市を、歴史あるとも旧市街とも表現してきたが、正式に言うとは誤っているかもしれない。この街は一度崩壊し、そして造り直されたのだ。ずっと昔、飛行船がこの街に爆弾を落とし、煉瓦と石の街は一夜のうちに惨憺たる姿に変わった。生き残った住人たちが、二十年かけて瓦礫を積み直し、修復を重ねて、昔とほぼ変わらない姿を保っている。その努力を尊く思う。

しかし空を飛ぶものに関する拒絶反応には根深いものがあり、二人のテスト飛行を嗅ぎつけるやいなや、クランプスと呼ばれる機械衛兵シリーズが、制圧せんと飛び出す有様だ。大変じゃないかと僕が尋ねると、兄弟は力強く笑ってみせた。「乗物の発明者って必ず何かから逃げたがってたんだってよ。俺らはどうだろ。おたくはどう思う？ 確かに俺はこれが人

類の発展に、なんて考えてないさ。富も名声もどうでもいい。ただ飛びたいだけ」

進歩するのは、とルクランは言う。三角図を描くペン先の擦れる音はさざなみのように絶え間ない。どうして進むのかって理由も、それが正しい方向なのか、後ずさってやしないかってのも、渦中にいると分からない。二重に被さった無知が歴史だよ。楽しいからやるって態度でちよいどいいんだ。

そう言つてのけた。ルクランの哲学はいつも僕に力を与えた。ローリンは膝のパンくずを払って笑う。

「必要なもんがあつたら言えよ？ あの検問所なんて軽々越えてやるからさ」

「そういや、昨日と今日、観光客を見かけたっけな」

「めずらしくもなんともないだろ、兄貴。この五年で観光にくる奴も、移住してくる奴もめちやくちや増えてんだし」

「いや、それがな、夫婦みたいだったけど。話してることが」僕はサンドペーパーをちぎりながら、ローリンは水を飲みながら、愛すべき兄貴分の言葉の続きを待った。

「工場のやつらは妙な宗教やってるみたいだな、きらきらした目してつから、外部の人間はすぐ分かるだろ。俺、読唇術できるんだ。一番上の兄が耳聞こえなくて。ほんで離婚する前

の思い出作りかな、冷めて冷めて冷えきった残りかすみたいな喧嘩してたのが、検問所でオススメされたか、広場の女神像見に行ったんだろうな、その後はすげえ仲良くなってるんだ」「やっぱりなんかあんなのかね、心を吸い取る赤い石。あ、けど心を吸い取って夫婦仲が良くなるのっておかしいか」

あんたら長男次男じゃないの、と尋ねたら、上に兄二人下に妹一人、とユニゾンで返ってきた。僕は研磨したシャフトにふつと息をかけた後で、二人を見た。彼ら以上に、信頼に足る人間はいない。意を決して口を開いた。

「変な話をするけど、例えばあの像の前に立つと、自然な欲望のみが吸い取られるんだと仮定したらどう。工場勤務の人々は飲まず食わずでも、規則に従い目を輝かして過剰労働、学生も同じく。消防士や衛兵は、生存本能と愛と正義感なしには職務に耐えられない。そこで作られたのが機械仕掛けのクランプス。夫婦は大部分の愛や憎悪や嫉妬を濾しとられて、綺麗で純粋な愛だけが残る。あの像を造った人物は、愛の一侧面しか理解できなくてそうなるってるとか」

ル克蘭は顎に指を当て、なるほど、と呟いた。「だからトドメを刺されるか、再構築できるか二種類のカッブルがいるわけだ。子供の頃みたいなの、愛に肉体的な意味が

伴わなかった頃の気持ちがあるか、人間として尊敬できるか、これを愛しこれを助けこれを敬いって、あの宣誓みたいな気持ちがあるかと」

「すっげー手繋ぎたいって思ったり」「笑った顔が見てえなって思ったり」

「髪を切ったくらいのがすごく気になったり」「おやおやあ、案外分かってんじゃないかヴァン・アーヴィング殿」

「いやどう考えてもドストレートにモテるだろ、おたく」

「さあね」

袖で磨いた林檎をかじって、ローリンはけどき、と言った。飲み込んでから喋れと兄は叱る。甘い香りにベルは頭だけを起こして、鼻をひくひくと動かしている。けど、どういう仕組みでそんなことができるわけ？ 四つの目を向けられ、僕はつつかえながら答えた。

「絶対笑う」

「笑わねえよ」

「もし笑ったらこれやるよ」

「食べかけだろ？ いらねえよ。……僕が思うのは、魔法とか、呪術とか、そういうのなんだけど」

僕が溜まった唾を飲み込む間も、二人は笑わなかった。それを指摘すると、ルクランは逆にそうでもなきや理屈がつかないだろ、とようやく表情を緩めた。

「例えば催眠。それほど強烈な暗示なら遠巻きに見ている俺たちにかからないのはおかしいだろ。観光客が見知らぬ土地のシンボルをそんなに熱心に見つめるって確信もない。ガスの類は？ 速効性に不安。そもそも精神病の薬だって、神経物質の伝達を活発にさせるか鈍麻させるか、そんな程度の作用しかないんだぜ？ それ言や、あの機械衛兵どもだってそうさ。どんな技術で機械に判断させ動かしているのか……ちやちな電算機なんかじゃとても追っつかない、高度な何かがあるんだろう。確かに俺の美学にや反する。信じられないが、けれど信じられないことが実際に起こってんだ。ちよつとずつ変なことが」

「ここいら、どんどん綺麗になってくね」

ぼつりとローリンが言った。工場の機械の音は、今も絶え間なく続いている。

「どいつもこいつも目だけきらきらさせて労働。犯罪率も離婚率も下がり？ 赤線も粗悪な酒も貧民街も一掃され？」

『正しい街』って感じだよなあ

「もしこの街を否定して、元に戻す奴がいるとしたら、それは極悪人と呼ばれても仕方ないだろうか」

『正しい街』は人間社会の『自然』じゃないぜ、ヴァン

僕の呟きに、力強く答えたのがルクランだった。

「……信じてくれたついでに。ここだけの話、僕はね、この現状を作った魔術師といずれ対決するつもりでいるのさ」

「俺たちにはできることがあるなら、いつでもどこからでも駆けつけるぜ！ そうするに決まってる」

間髪入れずにそう言い放ったのは弟で、ルクランは魚みたいに口をぱくぱくさせた後で、表情を引き締め、そういうことだ、と答えた。勇敢な弟と、慎重な兄。バランスのとれたいい兄弟だと心底思う。

二人が帰っていった後で、ロイドさんは起き出した。本当はもっと早く目が覚めていた様子だった。

「わしは、私は、昔、時計職人だったですよ」

「以前話してくれましたね」

「職人や、小料理屋や、民宿の主人なんてのは、妥協せず、余計で、非効率的で、おせっかいじゃなきや務まらない。だから私はあの像の前に立たなくてもよいということだった。」

今では一度は、あの像を見るのが義務になつとります。余所者のあの兄弟や、あんたさんや、ごたごたで籍を失くし、死んでも同然の私を除いて、すべての人が」

「ええ」

「私は、何一つ忘れとうないんです。忘れちまったとして、それすら思い出せないで平気に生きとりたくはないです。このボロクタは再生機です、死んだ家内の声が入つとります。ほとんど擦り切れてしまつとるが、宝物で」

平べつたい、小さな板上のものを耳に押しつけて、老人は微笑む。過去と現実の、ただ一つの接点を、彼は手にしている。日陰のベルが、かすかに漏れるノイズにピンと耳を立てた。

「これそのものはどうでもよいのですわ。これがあれば、私はいつでもなんぼでも思い出せますでな」

このダンスオルガンの音も、同じです。

ふつと最後に吐き出す息のかそけさに僕は打たれた。黒目のあわいがぼやけた瞳、歴史を重ねたその証を見つめながら。

僕はやがてこの巨大なオルゴールを再生させるだろう。それが何をもちたらずかを知らず、その理由も、それが正しい方法であるかも知らないままで。



二日ほど泣き暮らした。メルのことを思いながら、メルのことを憎みながら、メルのために祈りながら。どういことだと父を語りもした。知り合いと教わつただけで、二人がどういう仲なのか僕は知らない。父は彼女の指を折つたという。おそらくは意図的に。そして被害はそれだけじゃないのだろう。一年近く彼と過ごした僕には分かつた。父は言い訳も説明もせず、僕が怒鳴るのに任せていた。何も響いていませんという父の顔を見つめていて、絶望する。自分の中にあるのと同じ手触りを探り当ててしまつて、居心地の悪い思いをする。細かい経緯は分からない。大人の機微も分からない。けれどただ父は、あの人に会いたいだけなのだろう。僕にはまだそれも分かつてしまつた。罵倒の言葉をこれ以上思いつけずに黙つたら、父に頬を掴まれた。次の瞬間、僕の体は壁に押し付けられた。父の尖つた爪が、左目のほど近くにある。目玉を動かさずすぐに目に入る。

「お前が会いたいと言つたんだ」

頬を打たれたのも同じだった。この人は今、何を言った。

「お前が会いたいというから、ああして苦勞して蘇らせてやったのだ」

「……………ちがう」

「あいつがお前の言うように苦しんでいたとして、けれどそれはお前のせいでもあると言えないか？ よくもまあ善人ぶった口が叩けるな。そういう被害者面が上手いあたり、お前とあいつは似ているよ」

「……違う」

「いやいいのだよ。いつでも俺は悪役だ、それでいい。いくらでも責めるがいいさ。けれど素直になれよ？ 嘘はつくなと教わらなかつたか？ 貴様、内心で残酷にも願っているだろう。もう一度あいつに会いたいのだろう」

「違う！」

なぜ、こんな人がいるのだろう。他者の怯えを快感として、人を踏みにしてもたじろがない心の有様。それがたとえ息子であつたとしても。僕はメルに、嫌われていてもおかしくないのだと初めて思った。

氣絶していたらしい。夢の中にも、手首を切つて死んでいる彼女の姿が出てきた。僕は陰で震えている。闇は皮膚を乱暴に突き破り、僕の内側に進入する。体に悪い血が溜まつて

いる。僕の手を冷たい何かが包み、僕はさつきまで息苦しかつたことに氣付く。今や解放されたことも。

その後は夢を見なかつた。目を覚ますと、轍に溺れる蝶でも見下ろすような目で、父が僕を觀察していた。今思えば、僕の知っているメルは、つくりものの体をしていた。男でも女でもない、ぞつとするくらい蒼白の。きっとこれまでも、この人たちは愚かにも同じことを繰り返してきたのだ。何回目か知れないが、メルの目が覚めたとき、泣いている僕に氣付いたのだろう。そして優しい彼女は、それを見捨てることができなかつたのだろう。

「……僕はあの人をひきとめるために生まれたの」

「何をくだらないことを言うと思つたら。お前がそう思うのならそうなんじゃないか。好きにしな」

額に手の甲をべたりと押しつけて、なぜか一度頷いて、父は僕の口に何かを押し込み、僕の部屋から出ていこうとした。甘い味が舌に広がる。ヤグルマギクの香り。ただの飴だと、毒ではないと信じていいだろうか。

「違う」

ふと足を止めて、父の呟く声はいつになく熱がこもっていた。真実めいて聞こえるほどに。

「それだけは絶対に違う」

弱った心臓は、再び力を得て動き出した。あの人はずるい。恨ませてほしい、憎ませてほしい、それなのに。

僕もずるい。もうあの人を生き返らせるのをやめてあげてと、あの後一度として言わなかった。

僕は日常を取り戻す。初めてメルが消えたときほど、動揺はしなかったように思う。歳をとったからか。あるいは彼女の遺体を、きちんと目にしたからだろうか。痕跡一つないということは、思った以上の空虚をもたらすのだ。あれは現のことだったろうかなんて、自分を疑いだしたら、もはやまともには生きてはいけない。

元々苦手でもなかったが、僕は学校で、できるかぎり真剣に学んだ。僅かな時間があれば本を読んだ。ピアノにも真剣になった。日記をつけはじめるようになったのもこの頃だ。

もう何一つをなかったことにしたくなかった。

二年が経った。

それをどう表現していいのかわからない、予感というべきものが僕にはあった。嵐でもないのに夜中窓ががたがたと

るさかったこと。普段寄りつきもしない父の部屋に近づいたこと、ちょうどそのとき部屋の内側から、ノックにしては乱暴な打撃音が響いたこと。僕がドアを蹴破るのは決まりきっていた。必然だったのだ。

もつれるようにしてまろび出たのは、人の形を留めるのがやっとといった姿のメルだった。やっぱり、と頭のどこかで思った。それでも心は震えて、上手い言葉を見つけられなかった。痛ましい体を抱きかかえて、何度も名前を呼んだ。手を握られた。傷だらけの、爪の剥がれた指を絡ませる。父が彼女に暴力を振るったのではなく、不完全な魔法によるものだろう。ヴァン、と名前を呼ばれた。かすかな彼女の体温は、僕の指紋の隙間から染みこんで、さらに凍えていくようだった。恨みも憎しみも、彼女の顔を見る間に綺麗に拭い去られてしまつて、ずるいと心の中で叫んだ。こんなのはずるい。部屋の中に足を踏み入れようとした瞬間に、見ちゃ駄目、と彼女は叫んだ。父が死んでいるのだからベッドに走り寄り、そしていつかのマツチ箱を手にした。待つて、待つてくれ。

「待つて、もうあなたの死ぬところなんて見たくない」

僕の叫びが音になる前に、彼女は恐らくすべてをやりとげたのだろう。しかしメルには何も起きなかった。血を吐いた

り、倒れたり、消滅もしなかった。

「……失敗したの」

「いや。上手く行っただけなのに」

目を見交わす。瞬いた彼女の瞳から、突如として涙が溢れだした。堪らず抱きしめたとき、ごめんなさい、と震えた声で彼女は言った。僕の叫んだことのせいだと、ようやく考えが至った。ごめんなさい、弱くてごめん。あんなに強く、大きく見えた母親代わりが泣いている。膝に乗せてもらった。本を読んでもらった。雷の夜には眠れずにベッドにもぐりこんだ。眠るまで頭を撫でてくれた。子守唄を歌ってくれた。僕の涙を拭き取って、抱きしめてくれた。記憶が泡のように弾けて苦しい。もつと二つ二つを丁寧に、思い出したいのに。

彼女が僕から体を離し、立ち上がろうとした瞬間だった。ぼとりと、鈍い音を立てて、肉塊が彼女の足下に落ちた。

磨かれた床に、グロテスクな色をしたそれは不釣り合いで、二人揃って呆然と眺めるしかなかった。人になりかけて、なりそこなったもの。メルがふいに足を上げた。声にならない悲鳴を上げながら、裸足でそれを踏みつぶす。泣きながら、荒い息を吐きながら、踏みつけ、踏みにじり、蹴飛ばして。抱きしめて止めるまで、彼女による処刑は続いた。赤い染み

が床に広がっている。ぶよぶよした皮膚組織は破れ、飛び出した小さな眼球様のものは、どこでもない方向に視線を投げている。ひどい臭いがした。初めて見る彼女の凶暴性だった。

僕だって行動が伴わなかっただけで、同じようなものだ。瞼の裏が真っ赤に見えた。理性を越えて怒りは染み出してくるものだと知った。何一つ話はずに、さみしくあじけなく差し向かい、浴室で彼女の右足を洗った。僕の部屋に招いて落ち着かせる間に、生物ではもはやなくなった肉塊を、油紙に包んで、二度に分けて掬って、庭に埋めた。どうしても我慢しきれず、一度トイレに逃げ込み胃の中身をすべて吐いた。

部屋に戻っても、言葉をかけることがなかなかできなかった。だから血が付くのを構いもせずに抱きしめる。一息一息に、彼女は自らの暗闇を込めて世に放っていた。昔あんなに大きく包んでくれた体は、今や僕と同じくらいだ。僕の肩のくぼみに顔を埋めて、息をほどく彼女を見ていたら、自分が守らなければという衝動が沸き上がる。

「あの人のせいで安らかに眠れないのなら、僕に遠慮してやるんなら、もう気を遣ったりしないでもいい。あの人を消してから、メルも消える。それがいいと言われたら僕は受け入れる。その覚悟はあるから」

「あの子を恨むなんて、できないよ」

返った潤み声の伝えることの、意味が理解できなかった。

「彼のことは子供の頃から知ってる。あの子を守ったために私は一度死んで、魔法使いに見つかって、人ではなくなつた。そんなことを知らずに、彼は私をかばって命を捨てた。そして私と同じ、悪魔の取引に乗ってしまった。魔法使いになつて、同じところまで身を落としました。まったくくだらないの骨頂さ、だがね、それを笑えないんだ、私は」

僕はメルを指で梳きながら聞いていた。父は絶対に話そうとしない、過去の話だ。

「逃げ出したんだ。二人でいろんな街へ逃げながら生き延びてきた。あの子はマッドレスが固いだの馬車がどうだの口うるさくて堪らなかつたな。謝つても聞いてくれない、私がへまをするたびに罰金。自分はそれが堪えるからって、私も同じくらい傷つくだろうって勘違いしてるんだよ。馬鹿だ。私はそんなものぜんぜん重要だとは思わない。金で黙ってくれるんならいくらだつて払つてやつてよかつた。けど馬車が揺れたとき、私の肩にもたれて眠るあの子を見てたら全部分かつたよ。分かつてしまった。私は彼が心底苦手で、苦手なのに、どうしたつて嫌いにはなれないのだから」

宿命的に負けなんだ。君のお父さんを損ねることも、殺すことも、選択肢にそもそももないんだ。彼女は自嘲する。

メルを笑いたかつた。だけれど笑えなかつた。彼女の言葉は僕の心の真ん中を言い刺した。本心を隠しながら、横暴を許してくれと訴えるような目。どこまで許容されるか、測っているような父の目。呼吸さえも計算づくで行っているようなその態度。

初めて知恵熱を出したとき、揺れる父の背中から聞いた、医者を探し叩き起こす声。悪夢を見たときに、手に触れた冷たさ。なだめるようにごまかすように、口に放り込まれるヤグルマギクのキャンデー。僕はそれを知ってしまった。メルほど長い時間を共に過ごしたわけでもない、どうしようもない男だけれど、見捨てられない。そう僕が最初から、父親は死んだままでいいから、あなたは生きてくれなんて、どうしてか一度も思えなかつた。

「あなたのお母さんは、どんなひとだったんだろう。きつとすごく優しい人だったんだね。けれど……今は誰があの子を分かつてやれるだろう。私はもう、魔法使いとしても死んでしまつて、生きてはいけいないんだよ」

愛さなくていい、許さなくていい、ただあの子を一人にし

ないであげて。ずっと見ていてあげてほしいんだ。

メルはそう言つて、黙つてしまつた。二人揃つてあの人を憎みながら、その苛烈さに憧れている。沈黙が満ちた。またしても僕は残留者となるのだろうか。言いたいことも言えないままで。

扉ががたがたと鳴つた。命が生まれるとき、必ず風が吹くのだろう。しばらくしてそれは開かれた。絶対にノックをしない父だ。僕はメルの魔法の確実性に驚いたが、彼の顔色はすぐにでも死にそうなくらい悪い。凄愴な睨みを向けられて、迂闊にもまともに食らつてしまつて、僕は視線を逸らす。葉を、と父は言つた。明日には消えるからいらないと、腕の中で彼女は答える。

「……ひどいことばかりする」

「何がだ。お綺麗なつもりか、メル。お前はウエディングケーキみたいに真っ白か。初雪の平原みたいに無垢であるもんか。本当に嫌ならなぜ俺の手の届くところにいる。潔癖なお前は認めないだろうが、本当はこいつに会えることに期待しているだろう。素直にならんから俺が悪者をしているんだろ。う。感謝しな」

「そんな論理が通ると思つているのか。本気で」

息を飲む間もないほどの速さで、父は僕からメルを奪つた。彼女の腕を取り、無数に走つた傷に止血剤を塗り込んでいく。メルにはもう、暴れる気力もないようだった。

「期待させては逃げ回つて、子供を傷つけて、そうしてまで通す価値のあるものか、お前の理想は」

「傷つける？ 私がこの子を？ そもそも君が無茶をしなればいいだけの話だろう」

「無茶なものか。いい加減に諦める。俺のしたことと人工呼吸の何が違う？ 医者蘇生術と何が違うつて言うんだ？」

「分かっているくせに」

「一度手に入れた命を捨てるのは冒険じゃないとでも？」

「維持できるわけがない。不自然なんだもの、当たり前だよ。」

「なんで君はまた、間違えようとするの」

「俺は」

手を止めて、父は独り言のように言つた。

「俺の存在は害か。忌むべきものか」

「違う。違うけれど、君と私が出会つたことが罪悪だよ。ひとつの人間に生まれなかつたことも、とうとう分かりあえそうにないことも」

「……もういい。黙っている」

まったくの正反対の信条、性格、運命。互いにもつれ合つて混同した二重の螺旋形。心臓は父が、角膜は彼女を、差し出し合い奪い合うような、共有結合じみてる愛だ。僕のための腕はそれほどない。多分一つもないのだろう。言葉に反し、優しい手つきで抗生物質を塗られながら、メルは唸った。

「君の思いどおりになるんだったら死んだ方がずっとまし」
そして彼女は、そのとおりやりおさせた。もう僕も大人だ。傷は浅い。んなわけがあるか。どいつもこいつも死んじまへ。



自分がされて嫌なことは、人にもしてはいけない。それが人付き合いの基本だが、僕は日記を書くものとしてあるまじき罪を犯したことがある。父のノートを盗み見たのだ。内容は無味乾燥、あまりに空虚で拍子抜けした。他でもない、いつかのメルの頼みもあるが、あの多大なる空白を僕一人で埋めようとしたって無理だ。まるで世界には、父が座るべく用意された椅子なんてもう一つも残っていないようなのだ。いくら頭を下げられても、崇められても。そもそも彼女の代わりなんて言葉自体があり得ない。父にとつても、僕にとつて

も。

吐いた息は白くなる。手袋をしていても体は凍り付きそう。カチカチと鉄の板を叩いていく。凹凸が一つずれただけでも大問題だ。ふいごに、鉄琴に、ベルに、ドラムに、ハーブに、シンバルに、人形に。この機構の隅々に渡り、異なった指令を与えるディスクは、このダンスオルガンの心臓だ。

ただでさえ潮風で痛みやすいのに、加えてあの濃厚な霧。この街に霧は山から降り、海からも昇りくる。街角に、人工的な発生装置まである。それほどかつての爆撃と火災が、この街に傷跡を残しているのだろう。最後にメンテナンスという名の封鎖が行われてからの期間を考えても、錆びはひどいものだった。コーティング剤はいくらあっても足りないほどだ。

破れたふいごを補修しながら、ロイド老人が僕の名前を呼んだ。若造でなく、ヴァン君と呼ばれるようになり、少しさみしい。

「数年で、君のお父上は街を支配したと、そう思われますか」
「事実そうでしょう。催眠でも使ったかもしれません」

「私にはそうは思えませんよ。お父上の魅力は勿論のこと、私らは、進んで心を明け渡した」

昔、魔法使いと、魔法使いの弟子たちが二人、街に住んど

りました。そう言われていた。この古いぼれが産まれもして
いないような時分ですよ。僕の手はロイドさんの話に、完全
に呑まれていた。

「それは」

「詳しくは知らんですよ。私が知ったときにはもう過去形
の物言いでした。言い伝えのように。私が姿を知ったのはち
ようど子供の頃ですよ。あの空飛ぶ魚みたいな陰に怯えて、
爆撃にあつて焼け出され、誰もがすさんでいた」

残骸の中で、これからどうすると話し合いましたって、突風
が吹くわ残り火が再燃するわで地獄の様相じゃったです。途
方に暮れるしかなかった。ロイドさんの話も作業する手も淀
みない。

「霧がね、体がじつとりと濡れるような濃霧が立ちこめたの
はそのときですよ。黒い髪の女の人が広場の女神像の前に躍
り出た。あの頃は胸に赤い石なんて、はまっていなかったで
すが。霧の幕に、光る街の姿が投影された。在りし日のまま
のすべてを、私どもは見出ししましたよ。ここだって、このダ
ンスオルガンだって、廃墟と化していたのに、音楽が響いて
いた。天上から光が降り注ぐような、壮麗な響きが。あの夜
から初めて、我らは空を見上げました。不吉な飛行船の影を

探すのではない理由で。誰もが我知らず、宇宙を悟りました。
生きねばと。星が瞬いていた。明星が光っていた。何よりも
優しく敵しい夢を、あの美しい人は私どもに授けたのです。
どんな奇術を使ったのだから知れないが、役人の言葉なんかよ
りもよっぽど沁みた。そしてあの方が、今とまったく変わら
ない、若々しい姿のお父上が、拡声器を奪って登壇した」

——ア、ア。死んだ命は戻らない。しかし物は別だ。いいか、
壊れたのは紙でも木でもない。幸いにして石と煉瓦だ。また
直せばいいさ。

あの声が忘れられない。一瞬ですべての人の心を決めた、
あの甘やかな声、その響きといつたら！ 僕はその姿を、あ
りありと想像することができた。ぞんざいな分、かえって力
強く届く父の物言い、メル魔法の優しさと美しさ。廃墟と
化し、恐怖に震え眠れない街、そのさなか。霧の中で、誰彼
ともなく住民たちは深い眠りについたという。目が覚める。
周辺は再び爆撃され、しかしこの街だけ切り取られたみたい
に無傷だと知らされ、驚愕は広がる。魔法使いの弟子達への
感謝と共に、誰とはなく口に出す。「また直せばいい」と。手
工業と職人の街。彼らは二十年ですべてを成し遂げた。あの
とき響いた曲を、ワークソングとして口ずさみながら。後は

僕も知るとおりだ。

「年寄り連中は、あの人のことを覚えとるんです。光を我らに授けた二人を。奇妙な現象を、知りながら従容としてあの像の前に立つのかもしれないです。あの人が再び我らの前に現れた。だから何も考えずにただ、あの人の役に立とうと」

精神には、我慢できる程度の束縛が必要なのかもしれないません。老人の深い声には、隠しきれない好意がこもっていた。

「私は不信心だが、あなたさんが現れたのは運命のように感じます。年月をかければやがて結果に辿り着くと学んだ。街の再興も、この補修作業も」

唇の端で喋るような老人の声が、ふと途切れた。僕は彼に向かつて微笑んだ。彼もぎこちない笑みを返した。僕が加わって五年。巨大なオルガンのオーバーホールにも終わりが見えつつあった。

この街に来る前に、覚えていることがある。簡単すぎる学校の課題を解きながら、まだ子犬だったベルをブランケット代わりに膝に乗せ、僕は鼻歌を歌っていた。父がいたら絶対にそんなことはしない。何が彼の理不尽の導火線になるかわれないし、メルとの思い出は僕だけのものにして、大事に大

事に抱えていたい。僕は子守唄を歌った。メルが気に入っていた曲で、歌詞は随分と難しく感じたものだったけれど。

歌いながら彼女の両手は僕の頬にあり、指は僕の頬に触れ、鼻に触れ、唇に触れ、耳たぶに触れ。そして囁くように歌う。美しいものを探して。見出せなかったらもつとよく、もつと近くで見つめて。美しい言葉を話して。優しい言葉を、温かい声で。美しい音楽を聴いて。大切な人の歌声を。そして思い出して。あなたは一人ではないのだと。今になれば分かる。あれは素晴らしい人生訓だったわけだ。

ふと気が付くと、ベルが聞いたことのない唸り声を上げていた。視線を落とせば歯を剥いている。間の抜けた微笑み以外もできたのかと考えていた僕が一番の間抜けだった。

次の瞬間に息が詰まった。いつの間にか帰ってきたのだろうか。父は僕の胸倉を掴み、乱暴に立たせた。ベルは音もなく床に着地する。

「な」

「歌え」

「は、いきなり」

「いいから歌え。歌い続ける。間違えるなよ。知っている通りに歌え」

眼前に突き付けられたのはよく磨かれたナイフだった。何
がそんなに気に障ったのか、あるいは気に入ったのか。脅さ
れるままに、震え声で僕は歌った。

確か、僕がこの街に引越す二日ほど前のことだった。



三年も準備に費やせば、傷一つないままに誰かを蘇らせる
ことができるのだろうか。学校から帰った僕を、父とメルは
テーブルで差し向かったままに迎えた。

「魔法、上手くなった？」

「まさか。今回は私の譲歩」

「黙ってるクズが。いい加減に諦めたらどうだ」

「君の無茶と冒険に、よもや何のリスクもないだなんて思っ
てやしないだろうね」

「何だと」

「君が馬鹿ばかり繰り返したその代償を、誰がどこでどうや
って払っていると思う？」

「お前だともいうのか。いつ俺がそう頼んだ？」

「頼む頼まないの問題だとも？」

「お前のことは何でも分かるように思うときとまったく分か
らんと思うときがあるな？」

「君の話なんて二、三分のうちに二回も三回も分からなくな
るよ。どうして。君が馬鹿だから？」

なぜ疑問形で会話しているのだろう。いよいよもって救わ
れがたいと胃が痛くなった。不毛な応酬は、もういい寝てる、
という声で締められた。鈍い音を立て、父の額はテーブルに
打ちつけられる。そのくせブランケットをかいがいしくかけ
るメルに溜息が出た。

「ちよつとずるをしてしまった。大きくなったね」

「どうしたの」

「中途半端はよくないなって思っつて。また呼び戻されたついでに、君にお別れを言いに来たんだ」

「嫌だつて言ったら？」

陰りを見せた笑顔は、嘘だよの一言で元に戻った。

「命は一度きり、そういうお決まりは大事だと僕も思うから」

「ごめんね」

続く言葉は無理をさせて、だろうか。僕にはもう正解がど
れか、分からなくなってしまうた。だってどうしたって彼女
に会いたいのだし、父に安らぎをあげたいとも思う、けれど

これ以上彼女を苦しめたくはない。圧殺してきた中身はばらばらに散らばり、ちぐはぐな苦しみを訴え叫び僕を取り囲む。もう何年もずっと。

「相談をしいい」

「いいよ。なんだい」

「僕は、僕をさみしくする人たちを、許せそうにないんだ」

沈黙が耳を突く。しばらくしてメルは僕に微笑んだ。昔と何一つ変わらない笑顔だった。許さなくていいよ、と血の気の褪せた唇が動いた。

「許せないままでいい。さみしいままにして、恨めばいい。時間が経っても、どんなに楽しい時を過ごしても、他のことを考えることが増えても、思い出せばすぐにさみしくなる。記憶ってそういうものだから。けれどそれがひとなんだよ」

一瞥で、男の運命を決める目をしていった。別れの言葉は聴きたくなかった。けれど何かを言っただけだった。頷いて別れたかった。

「魔法と機械工学は似ている。一番大事なのは、代償となるエネルギー源と、作動し始める条件の設定だ。今度こそ私は、あの子の手の決して届かないところに行く」

メルは静脈の青が浮かんだ手で、僕の手を掴んだ。

「だからあの子を諦めさせて。猶予はある。君が二十一になるまでに。同じ時間同じ場所で、ハンカチを返したい、とあの子に伝えて。それで伝わらなかつたらそれまで。私はプレゼントを用意するから。あの子のためじゃなく、誰のためでもなく、君のために。できなくても、それでおしまい」

僕が、と言うと、君にしかできない、とメルが論じた。

「辛い思いをさせた。ごめんなさい。自分勝手だけれど、君と出会うべきじゃなかつたなんて思えないんだ」

言葉は、凍りついたまま、一向に気道から剥がれようとしなかつた。さよならも別れの言葉もないままに、深い悲しみと愛着を込めて名前を呼び合うだけ。これから永遠に分かれるのだと僕は知っていた。

事実これが、僕とメルとの一番長い別れになった。

父はまだ眠っている。いつときベッドに寝ころんだまま、僕は何をすべきか決めかねていた。部屋の片隅の姿見を見る。

「嘘だ」鏡の中の自分に向かって言った。「僕は嘘つきだ」

ひどい顔だった。一人になった途端に、涙だけは素直になつた。

「嘘つき野郎！」

機械が好きだった。

見えない糸がそれぞれに繋がっている。一つとして無駄なものではなく、意味があつて存在する。すべてが絡まりあつて繋がり、正しい向きに回転し、力が加わり、伝わっていく。省かれることも、余されることもなく。

父にもメルにも伝わらずに、空転する僕の言葉と違つて。ある日ダンスオルガンに足を踏み入れて、ベルが啞えていたのは、ロイドさんの再生機だった。嫌な予感しかりなくて、僕は一人で広場へと走つていった。克蘭プスが居並ぶ中で、ロイドさんは女神像の前で膝を付いていた。茫とした表情に、失われた物の大きさを悟つた。これほどの暴挙を、僕はどうして見逃してきたのだろう。かつかつと、像の前に歩いて行くのは父だ。女神像の胸にあるはずの石を、手に持っている。待ち焦がれていた、時が来たのだ。

僕の未来は父と共にはない。なぜなら父に未来がないからだ。いくつかの心を集めたの。百、千、もつと。もう何を代価



にしても、あの人は還らないのに」

「知つた口を利くじゃないか」

背中に向かつて問いかけると、父は振り返らずに答えた。

「あんただつて分かつてるんだらう。街を發展させ、人を集めて、その人間性を利用する。そんな迂遠な方法をとらなくたって、この機械兵とあんたの権力や魔法で強制的に、もつと早く条件を整えることだつてできたはずだ。薄々感づいているんだらう。恐らく失敗すると。絶望しているのだから。次の手なんて、他の手段なんてもう思いつかないつて」

父は僕を見た。そして手の中の、彼の部屋から拝借してきた小型拳銃に気付き、目を細めた。覚悟はしたつもりでも、自然と膝は震えた。敵意を向けた者に対する彼の振る舞いを、知らない訳がなかったからだ。

「親殺しても演じるか？ 血は争えないな」

とんでもない台詞だった。彼と対等にやりあい、「あの子」なんて呼んでみせるメルの偉大さを思う。膝の震えが背筋に這い上がる。駄目だ。恐れるな。悟られるな。ここまで来たら、もう戻れないのだから。

「なんだよそれ。昔なにやらかした、あんた。……殺すつもりはないが」

僕は銃口を天に向けて、引き金を引く。小さいくせに厭に固くて指が痺れた。

「宣戦布告だ」

呆然としている父の手から赤い石をもぎ取る。いつも鬱陶しく思う霧は、今回ばかりは僕の味方だ。遠くで爆発音が二つ。霧の発生装置が壊れる音だ。窒息するほどの白に紛れて、駆け出した。石は直視しないようにハンカチに包んだ。砕けたらどうなるのか予想はつかない。僕はどんな予断も持ち合わせしていないのだ。何が起き、どこに結ばれるか、まったく分からないままに動くしかない。運の悪いことに、父の硬直はすぐに解けたらしい。僕を追いかけてくる気配がする。足音の感覚は狭く、近い。世紀単位で生きている人だなんてとてもじゃないが信じられない。足止めがしたい。

威嚇。かすめるだけでいい。最悪当たらなくていい。振り返り人影の、足に狙いを定め、引き金にかけた指に、力を込める。銃声が耳をつんざき、そして城壁内に反響する。

「かすめるだけでいい、当たらなくていい……そんな覚悟で何ができようか。馬鹿め」

風が吹いた。姿を現した父が、握っている右手の指を、少しずつほどいていく。カラン、と鉛玉が煉瓦道りに転がった。

狙いは悪くなかった。腿の側面を削れていたはずだった。この至近距離なのに。頭に上っていた血が、一斉に下がっていく。僕は再び背を向けて走り出す。どうすればいい。

遠くの潮騒と、工場の機械の音、機械兵の物騒なタイヤのスキールの中に、聞き慣れたエンジンの音が割って入って僕を包む。霧の中から、伸ばされた腕を僕は掴んだ。体は浮き上がり、小型の飛行機械に着地する。操縦しているのは意外にも兄の方だった。

「本当に来てくれた」

「当たり前だ！ 遅くなって悪い。二つとも破壊成功。あいつはクランプスを妨害してる。そんで、どこに行けばいい」

「ダンスオルガンに向かってくれ！」

「いいぜ兄弟。今日は飛ぶのにや一番いい風だ」

怖い怖いと呟きながら、ホバリングして彼の作品は進む。高い歓声を上げて飛びまわる弟とはまるで違う。安全だし酔うこともない、彼でよかつたと思う。口約束で、テロリズムまがいの親子喧嘩に付き合ってくれる親友がいる。それが僕をいくら勇気付けただろう。日が高くなっていく。地面が温められ、冷たいままの海から風が吹く。もうすぐで霧は完璧に払拭され、そして僕の我慢も終わりだ。

柵の内側に降り立つと、ル克蘭はすぐに飛び去っていった。僕は建物の内部に入る。ぴかぴかに磨き上げた、埃ひとつない巨大な音楽堂、この街の栄華、凍った時間を動かす歯車。ベル、と一声呼ぶと、彼女はすぐに駆けてきた。赤い首輪に隠した鍵はレプリカで、本物は歴史の合間に消えてしまったらしい。鍵穴から合う形を解析したのだ。それをパネルの穴に差し込めば、ハンドルが解除される。何度も何度も力を込めてそれを回す。正直に言えば父のことは二の次だった。ただロイド老人を元に戻らなかった。人間性を失った人々を、元に戻したかったのだ。僕は愚かだ。もしかすればと思った。メルを再生を望んだ。見て見ぬふりをした。彼女に教えられたことも忘れて。

硬質な靴音が無音のフロアに響いた。側近は下がらせたのだろう、振り返れば父が立っていた。

「それを返せ」

「もう無駄なんだよ、これを使っても、それがどんな魔法でも、あの人は還ってこない。あの頑固さはあんたが一番知ってるだろう」

歯車がかちかちと、噛み合う音がした。風は城壁に吹き込み、なかなか出ていこうとしない。あの城壁すべてがこの建

物のためにあると言ってもいいだろう。ふいごが緩やかに動きだし、空気を圧縮させていく。その気配は、心臓の拍動に似ていた。一緒に眠ったときの、メルの鼓動の音に似ていた。

「死んだものを取り戻すって、そういうことじゃない。全部元に戻るなんて、奇跡でも起きないかぎり不可能なんだよ」

「奇跡なら起こせる」

「あんたの魔法は奇跡じゃない！ もう、一回全部失ってるんだよ。あの人のいない空白は、絶対に埋まらないんだ。何をしたらって、死ぬまでさみしいんだ、僕も、父さんも。さみしいままでいい。けれど二人だから、語り合えるのに」

僕は鍵を回す。歯車は急回転し、すべての機構が動き出す。

「あんたの魔法は、いつだって悲しい」

キュルキュルと音を立て、人形が飾窓でお辞儀する。演奏するものと、ダンスを踊るもの。オルガン、ハーブ、グロッケンが、複雑なハーモニーの曲を奏でます。僕はそのメロディを知っていた。心を直接揺さぶるような、家に帰りたくなるような、誰かと居たくなるような、やるせなく切なく美しい響き。メルの声。メルの指。瞼、頬、鼻、唇をなぞっていた、一番清潔で目に見える、愛というもの。建物すべてが楽器だった。和音はフロアから吹き抜けまでを貫いて、そし

て街に音楽が溢れだす。空から音が降りてくる。まさかこれほどのものだとは思っていなかった。只中に立っているだけで、心臓が震えた。父を見た。泣きだしそうな顔をして、精巧な造りの人形、コミカルな動きをじっと睨んでいる。一度の和音とウィンドチャイムのきらびやかな音を最後に、演奏は終わった。無音だ。いつもなら響いている工場の機械の音さえ消えた。すべてが、この街のありとあらゆるすべての者たちが、立ち止まり、天を見上げ、耳を澄ませている。

「思い出した」

しんと静まったダンスフロアに、父の音が落とされた。

「思い出した。あいつはそこに立っていた。壁のシミだった。踊ってやったさ、何度でも。……もうこんなことを、語り合う相手はもういないのだと思っていたよ。全部が俺から遠ざかっていく。忘れて、消えてしまおうと思った」

「遠ざかっていくのはあなただよ。あなたの方なんだ」

「そうらしい。どうして誰もあいつの綺麗なのに気が付かないんだろう。純粹も過ぎれば化け物だ。なんであれで生きてこれたのだろう。俺ばかり嫉妬して、苛立って憧れて……あんな奴は一人でいたらすぐに悪い奴に騙されて汚されて死んでしまうんだ。だから絶対に、永遠に、俺のそばから離れたら

いけないんだ。けれど。あいつが最初に死んで帰って来たときも、髪が短くなっていたことを責めたりして。俺のために死んだことも知らずに俺は。俺に命を分けたのはあいつだ。くたばりぞこないは俺の方だ。なのになんで」

深い息をついて、父は黙った。何を考えて、何を思い出しているのか僕は知らない。再生機や日記で、何を留めておけるだろう。あれはただの鍵だ。触ればすべてが生き返る。僕の言葉は、確かに誰かに作用した。それだけで泣きそうになった。これでよかった。どの選択肢を選んでも、僕は満足することはないので。父は天を見上げて、再び口を開いた。「忘れないものだな、きつかけさえあれば、簡単に浮かび上がる。意味が分からんよ」

「思い出話ならつきあうよ。いくらでも。僕は何も知らない」
ん、と父は手を僕に差し出した。なにと尋ねる前に、石を出せ、と言われた。

「まさか諦められないとか言うなよ」

「いや、もう終わりにするさ、労働搾取企業にお似合いの勤勉な住民たちを、元の腑抜け共に戻さねばならんのでな」

「ひどい言い様だよまったく。危険はないんだな」
力強く頷かれ、僕は赤い宝石を手渡した。父はそれを靴の

踵で碎いた。ぞんざいにも程がある。僕の方がぞっとするくらい幕切れだった。

「公社は……あとはエツケナーあたりに全部任せるか」

「やめなつて。あの人の頭もつときみしいことになりそうだ」
諦めて、これからどうする、と尋ねると、お前の父親でもするさ、と父は答えた。もう遅いかもれないがな、と僕の伸びた背に、初めて気が付いたように彼は付け加える。

「父さんだったさ、ずっと」

僕にチェスと権謀術数と狡猾さを教えたのは父だ。孤独な僕に、惜しみなく本と天体模型と、子犬を与えた、本当は犬嫌いで、それを隠していると勘違いしている男。正直な話、ヤグルマギクのキャンディなんて僕はまったく好きではなかったけれど。メルと、ブラム。二人のどちらが欠けたとしても、きつと生きてはいけなかった。僕はおりこうに座ったままのベルを撫でた。ずっと鍵を預かってくれた家族。敏感な耳には、あの高音響は辛かっただろうに。そういえば、と僕は父の名前を呼んだ。

「メルから伝言を一つ預かつてる。僕が二十一になるまでに、父さんが完全に諦めたら、伝えてつて。ぎりぎりだったね」

「何だと」

『同じ時間同じ場所で、ハンカチを返したい』つて言つて分かる？』

父は懐から何かを取り出した。近づいて覗き込む。それは古びて針の止まった銀時計だった。日付は今日と同じ、時間も現在からあと数分だ。

「時間が無い」

「意味分かつたの。何をどうすればいいんだ」

「城壁を出たところの糸杉へ、あと五分ほどで。あいつめ」
瞬きをするばかりの僕は、父の手を引いて走つた。扉を蹴破るとすぐに、ローリンの声が飛んだ。

「乗つて！ 話は聞かせてもらつたぜ！ 掴まってくれ、ミスタ・アーヴィング！ 弾丸列車より飛ばしてやるから」

振り向く父の背中を僕は押した。スピード狂のヒコーキ野郎に敵う者はないだろう。お前はこつち、とルクランに腕を引かれて、僕たちは飛び立った。そうしている間にも時は過ぎ去っていく。乗物の発明者は逃避を願つている？ まさか。一度つきりて消えてしまう時間の価値に、真摯な者たちだけが栄光を手にしたのだ。風を切る音が耳にうるさかつた。ローリンの飛行機械は矢のように、重さなどないように遙か先を行く。人々は僕たちを見上げている。余所見などすること

のなかった、人形の目をしていた人々が。子供が手を振っている、ハンドサインをする若者もいる。何を急いでいるのか、理由も知らないで、ただ憧れだけを向けている。空に視線が向けられる。遅れて僕らも城壁を乗り越えた。ローリンの飛行機械が、高度を下げ、急激にスピードを落とす。父は停止するのを待たずに飛び降り、慣性に逆らわずに激しく転がったあとで、腕を天に向かって広げた。

何かが糸杉のてっぺんほどの高さに現れ、落ちていく。

地面に激突はしなかった。父の頑丈な腕が、何かを固く抱きとめていた。着陸するが早いか、何も言わずに、ルクランが僕の背中を押した。夢を見ている心地がしていた。

「びっくりした……」

「こっちの台詞だ。お前、俺がもし間に合わなければ」

「勝手に一人で冷たくなって消えてた。それだけのことだよ」

「いまさら、お前、なんで急に」

「妥協しようと思つて。最初はヴァンのためだと思つたんだ。本当は言いたいことがあるんだろうに、じつと堪えて……。」

なんて健気なんだろうって。報いなければと思つたんだ。けれど大半は私のためだよ。私がここにいたいからだ」

「返事が遅い」

「そういうこと言う。ぜんぜん格好つかないよ。こんな怪我作っちゃって、君が。よりにもよつてあの君が」

二人の会話は途切れ、しじまに、ただ耳をすました。五年、あるいはそれ以上の、僕みたいな若造にはとても量り知れない長い長い歳月が、二人に何をもたらしたのか想像すらできない。頬の泥を拭いながらメルも、されるがままの父も、何を話せばいいのか分からないと言いたげな顔をしていた

二人の魔法使いを親としながら、僕に魔法は使えない。

しかし知っている呪文が、一つだけあつた。父は欲しいものを手に入れ、あの人は素直に泣けるようになって、街は愛を取り戻し、僕は明日から日記を書かなくてもよくなる、そういう呪文が。

"For better or for worse, for richer, for poorer, in sickness and in health, do you promise to love and to cherish to be

faithful until death parts you ?"

"Yes, of course."

"Shut the fxxk up!"

END

月刊缶じうす 1月号 通巻195号
2013年 12月24日発行
編集人 芹沢一 姫川乃愛 菊田泰右
印刷所 広島大学文団BOX